

マンガ研究

■編集・発行 日本マンガ学会

■発売 ゆまに書房

●VOL.1~9 各冊定価：本体2,000円+税／VOL.10~ 各冊定価：本体1,800円+税

私たちにとってマンガとは、かつて、なんであったのか、いま、何であるのか、そしてこれから、なんでありうるのか…。これまでにないマンガ研究総合誌。

年2回（春・秋）発行
A5判並製／平均180頁

最新号

マンガ研究 VOL.13 2008年4月30日発行

ISBN978-4-8433-2829-3 C3379

▼研究論文 ウィンザー・マッケイのメタ表現と見世物文化（三浦知志）マンガ家認知情報に基づくマンガ事象の構造化と「弱い紐帯」の発見—しりあがり寿とつげ義春はなぜ繋がるのか？—（伊藤貴一・小野田哲弥）▼研究ノート マンガを利用した学習の可能性の考察—「マンガで心理学」と「マンガを心理学」の観点から—（玉田圭作）明治期における北沢楽天の「凸坊」漫画のあり方（徐園）『スラムダンク』72頁の無音—非映画的手法について—（砂澤雄一）▼特集 マンガ相互通行の現状について 一国際交流委員会周辺の活動より—・ジャン＝ルイ・ゴテ氏（仏コルネリウス社・社長）インタビュー・『大発作』刊行記念トークセッション「ダヴィッド・ベー氏を囲んで」・1990年代『モーニング』の海外マンガ紹介について（原正人）

マンガ研究 バックナンバー

マンガ研究 VOL.1

ISBN978-4-8433-2496-7 C3379

第1回大会特集号：2002年5月29日発行

▼日本マンガ学会第1回大会記念講演【対談】夏目房之介×呉智英 冗談からこま—マンガ評？マンガ論？マンガ学？▼評論・研究のあり方をめぐって—深読みと客観のあいだ— ラウンドテーブル発言趣旨（呉智英）『マンガ批評体系』の編

者として（村上知彦）手ヌキと過剰な意味性について（長谷邦夫）▼マンガ資料の収集・保存—セワシくんは『ドラえもん』を読めるか— マンガ・データベースについての考察（秋田孝宏）マンガの資料収集と保存について（内記稔夫）▼マンガと美学—はたしてこの両者は「敵」なのか— 仲介者としての「マンガ」、「マンガ研究」（高橋瑞木）「マンガの美学」に求められるもの—ツールとしての学から、コミュニケーションとしての学へ—（小池隆太）「マンガ」と「学」—その希薄な関係（大城房美）漫画で表す—まんがにふさわしい美学の反面教師としての中学校新美術科—（ジャクリーン・ベルント）ほか

マンガ研究 VOL.2

ISBN978-4-8433-2497-4 C3379

2002年10月4日発行

マンガにおける人物のデフォルメ表現についての心理学的考察（雨宮俊彦）手塚治虫「リボンの騎士」論—く男装の少女への誕生（押山美知子）マンガ読解過程の分析—マンガ読解力と眼球運動—（中澤潤）ある犬の半生—『のらくろ』とく戦争—（宮本大人）岡本綺堂「白髪鬼」から高橋葉介「白髪の女」へ—文学テクストのマンガ化について（岩下朋世）あすなひろし研究に向けてのノート（1）—あすなワールドを鳥瞰して（高橋徹）ほか

申
込
書

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491/Fax.03(5296)0493

[お取り扱い書店]

マンガ研究

セット

お名前

ご住所

TEL ()



マンガ研究 VOL.3

ISBN978-4-8433-2498-1 C3379

第2回大会特集号：2003年3月20日発行

▼基調講演 マンガと認知—脳はどうマンガを読むか—（養老孟司）

『風の谷のナウシカ』における「物語」と「美」の問題（小池隆太）マンガの予言する未来—究極の人型パソコンが実現した世界—（萩原由加里・森亮資）家庭マンガ『ブロンディ』—長寿连载の秘密—（木下栄造）フランク・A・ナンキベル—日本の漫画史の脚注（ロン・スチュワート）まんがの画面から見えるもの—日曜研究家としての立場より—（平松和久）白土三平と身（四方田犬彦）ほか

マンガ研究 VOL.4

ISBN978-4-8433-2499-8 C3379

第3回大会特集号：2003年11月27日発行

▼基調講演 20世紀デザイン史におけるマンガの位置（柏木博）追記：柏木博氏の基調講演によせて（高橋瑞木）▼研究発表 江戸戯画表現史序論（清水歎）中国のカートン（南雲大悟）香港武俠漫画について（日下みどり）マンガにおける光の表現（2）—屈折と反射—（久保登）マンガから小説へ—ヤングアダルト文庫における変化—（玉川博章）クローン人間—萩尾望都の世界が暗示するもの（Yumi Adachi）ほか

マンガ研究 VOL.5

ISBN978-4-8433-2500-1 C3379

2004年3月31日発行

マンガ読解力の規定因としてのマンガの読みリテラシー（中澤潤）岡崎京子「リバーズ・エッジ」と時代（坂井竜太郎）コミック産業における作家の成長要因のアンケート調査に基づく分析（井上和久・藤末健三）「新聞漫画の眼—人・政治・社会」展評（宮田徹也）▼特集 ヨーロッパにおける日本マンガ—2003年5月大阪国際交流センター開催の国際シンポジウム資料

マンガ研究 VOL.6

ISBN978-4-8433-2501-8 C3379

第4回大会特集号：2004年12月20日発行

▼講演 マンガと江戸 その表現と諷刺精神／日本人の諷刺精神と戯画・諷刺画（紀田順一郎・コメントーター／清水歎・宮本大人）▼研究発表 武道の教育・普及にマンガの与える影響（松本秀夫）雑誌研究の可能性と問題 昭和30年代の少女クラブを読む（平井和久）小野佐世男はインドネシアで何をしていたのか（小野耕世）土郎正宗作品における『女性』（小池隆太）ほか

マンガ研究 VOL.7

ISBN978-4-8433-2502-5 C3379

2005年4月20日発行

マンガのコマの読みリテラシーの発達（中澤潤）日本のサブ・カルチャーと物語性（前田雅司）マンガにおける「読者」と「語り」の問題について—『マンガ産業論』と『マンガ学への挑戦』を読んで—（砂澤雄一）二十世紀の正負の遺産一名作「地獄でメスがひかる」と言語規制という悪弊—（茶谷薰）文明開化期における違式・違条例の図解による普及啓発について（百瀬響）▼特集 戦争をテーマにした漫画・マンガ資（清水歎・内記稔夫）

マンガ研究 VOL.8

ISBN978-4-8433-2503-2 C3379

第5回大会特集号：2005年12月31日発行

▼研究発表 英国大学におけるマンガの授業—日本学とManga—（大野陽子／座長コメント：細萱敦）マンガにおける語りの錯綜と重層的な物語の可能性（井上加勇／座長コメント：村上知彦）戦後「少女小説」における恋愛表象の登場—『女学生の友』（1950～1966）掲載読切小説のテーマ分析をもとに—（藤本純子／座長コメント：藤本由香里・大城房美）マンガの音喻表現にみる聴覚情報の視覚的記録（小松正史・吉村和真／座長コメント：茨木正治）ほか

マンガ研究 VOL.9

ISBN978-4-8433-2504-9 C3379

2006年4月10日発行

▼研究論文 手塚治虫「リボンの騎士」における「性別越境」の両義性（岩下朋世）女性向けマンガ雑誌におけるジェンダーとセクシュアリティ（奏美香子）▼研究ノート 「風の谷のナウシカ」における「語り」の構造について（砂澤雄一）地方紙における新聞マンガの変遷と特徴（岡部拓哉）コミックマーケットにおける同人作家の商業誌経験（玉川博章）▼報告 マンガを通じた国際交流への期待—モナシュ大学の事例から（伊藤遊・山中千恵）▼特集 マンガの異文化ースイスと日本からみたコミック表現の諸相 序文（ジャクリヌ・ベルント）スイスのコミック（クリスティアン・ガッサー）ロドルフ・テプフェールの「版画文学」理論コミックの本質としての描線と顔（森田直子）終焉の記号、記号の終焉（神尾達之）

マンガ研究 VOL.10

ISBN978-4-8433-2351-9 C3379

第6回大会特集号：2007年3月31日発行

▼研究発表 連載75年を閲した『ブロンディ』（木下栄造／座長コメント：細萱敦）韓国における矢沢あい『NANA』の受容（金慈／座長コメント：大城房美・秋田孝）Rube Goldbergマンガ研究—発想訓練カードゲームの試作—（齋藤裕美／座長コメント：小野耕世）占領期の手塚治虫—占領期雑誌記事情報データベースによる“新発掘”資料とその評価—（谷川建司／座長コメント：小野耕世）日本児童雑誌における視覚物語の様相—『少年俱楽部』（改『少年クラブ』）を中心にして—（潘郁紅／座長コメント：村上知彦）『講談社の絵本』における「子供が良くなる」漫画の洗練過程（宮本大人／座長コメント：吳智英・茨木正治）ほか

マンガ研究 VOL.11

ISBN978-4-8433-2352-6 C3379

2007年3月31日発行

▼研究論文 リンド・ウォードの「絵小説」（笛本純）岡崎京子『リバーズ・エッジ』における「内面」の位相（杉本章吾）「正チヤンの冒険」の変容過程—初出作品の検討と単行本化の問題—（竹内オサム）少女マンガの源流としての高橋真琴（藤本由香里）▼研究ノート 亂反射するテクスト—富樫義博『レベルE』論—（佐藤ちひろ）▼報告 張樂平「三毛流浪記」の改作について—三毛と大道芸人—（材木谷敦）▼特集「はだしのゲン」をめぐる国内外の研究『ReadingManga』の「政治性」「ゲン」論特集の序文に替えて（ジャクリヌ・ベルント）グローバル化の中で日本マンガを読む—書評（伊藤公雄）ほか

マンガ研究 VOL.12 第7回大会

特集号 ISBN978-4-8433-2760-9 C3379

2007年10月31日発行

▼研究発表 フランスにおける若者マンガ読者層とBD（猪俣紀子／座長コメント：細萱敦）華君武による猪八戒イメージの利用（南雲大悟／座長コメント：小野耕世）『嫌韓流』は如何なる蒙を啓くのか？（杉浦基／座長コメント：吳智英）手塚治虫と《生命メタモルフォーゼ》（石川翠／座長コメント：長谷邦夫）あだち充と岡崎京子—両作家のにおける死のテーマ—（鎌野日出男／座長コメント：長谷邦夫）マンガの3要素から見た表現構造の歴史的変遷について（荒川稔／座長コメント：茨木正治）ほか

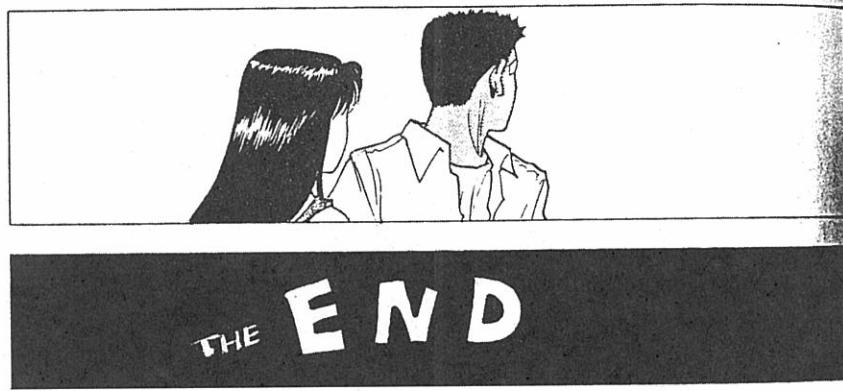


図4
富樫義博『レベルE』第1巻、集英社、1996年 p.147



図5
富樫義博『レベルE』第1巻、集英社、1996年 p.197

また、第2話では、第1話の登場人物が一切登場しないまま、新たに登場した四人の中学生の視点で物語が進む。だが、連載初期であり、異星人と地球人を描く、という第1話からの流れは汲んでいるため、『レベルE』は特定の主人公を持たず、この流れをもって作品としての統一性を持たせている、と読まれるだろう。更に、絵柄の変化がある。第1話と比較して、影が多く描き込まれており、人物の顔も動きも、デフォルメやコメディ化されることが極端に少ない《図6》。総じて、第1話よりも緊張感のある画像処理が為されており、視覚的な印象の上でも第1話と第2話は隔てられている。ただし、その差はあくまで、富樫義博の絵であるということ

が明らかな範囲内であり、全く別の作家の絵柄と取られることは無い。こうした擬態によって、作中話は、一個のマンガ作品としても、『レベルE』の一エピソードとしても成立しているのである。^{7,8}

中学生たちが目撃した異星人は、好意を抱いた異性を捕食する自分たちの種族の生態に、罪悪感とジレンマを抱いていることが明らかになり、捕食後の異星人の絶望の表情も描かれる。そして、その後の中学生たちの様子に重ね、中学生の一人のモノローグが入る。

山本（論者注：異星人の名）に一言言ってやりたかったなとふと思ったが／結局何も言えない事に気付いて考えるのをやめた／明日から寝るなと言われてもオレは眠くなる／食うなと言われても腹はへる／言える事など何もないのだ（1巻p.p.196-197）

こうして、作中話は完結する。メッセージ性を感じさせながらも、抑制した語り口で、それを前面には出し過ぎない描き方である。ところがその直後、それまでの全ては王子が描いたマンガであるとされ、王子は作中話に対し「いちがいに地球の善悪だけじゃくれないっていう事実が」（1巻198頁）などと解説する。マンガに隠されたメッセージ性なるものは、胡散臭さを付与されながら、読者の前に顕かにされるのである。この視点は、作中話の一個の作品としての完成度ゆえに、更に一段階外側にも、容易に適用されるだろう。作中で与えられた、マンガ表現そのものに対するメタな視線は、「友情」「努力」「勝利」といった数々のメッセージを持つ他のマンガにも拡張されるのである。



図6
富樫義博『レベルE』第1巻
集英社、1996年 p.153

『Reading Manga』の「政治性」

「ゲン」論特集の序文に替えて

On the "Politics" of *Reading Manga*:
Introduction to the Special Issue
National and International Research on Barefoot Gen

ジャクリーヌ・ベルント
Jaqueline Berndt

2005年度の前期に私はドイツ・ライプツィヒ大学日本学科で客員教授として過ごす機会を得た。当地ではマンガ論に関する様々な活動を行ったが、学期末に開催した国際シンポジウムはその締めくくりとなるものであった。ドイツ学術交流会の援助によって実現したこのシンポジウムは、「Reading Manga」をタイトルとした。

タイトルから生み出されるアプローチの可能性は、『マンガの読み方』(宝島社、1995年)に示される方法論、あるいはマンガ読者をめぐる社会学系の調査研究など多岐に亘るものであろう。の中でも本シンポジウムの企画意図は、日本マンガ研究者や日本語のできないコミック専門家、さらに日本学研究者といった、他領域の人々が同じマンガ作品を読み、それについて討論することに重点を置いた。普段交流しない人々がこのような形で接触することを通じ、彼らの個人的な趣味だけでなく、それを裏づける諸文化特有のマンガ観も見えてくる、という私の仮説が何らかの形で立証できるのではないかと考えたのである。また、マンガ研究においてまだ未発達の段階にある作品論——ここで言う作品論とはマンガの制作や受容を巡るデータを、時代性や具体的な表現と関連づけながら、マンガという枠組みを超えるような解釈を行うことだが——にも貢献することを目的とした。

シンポジウムで焦点を当てたのは、中沢啓治の『はだしのゲン』である。残念ながら準備期間の短さもあり、複数のマンガ作品を対象とすることはできなかった。周知の通り、『はだしのゲン』は最も早く翻訳された日本マンガの一つである。本特集で紹介するロジャー・サビンの論文が示すように、欧米で驚くほどの反響を呼んだことでも知られている¹。『The Comics Journal』誌で定期的に日本マンガのレビ

ューを発表しているビル・ランダルは²、『はだしのゲン』の初期翻訳版を「それ以後のマンガ翻訳者が手本とするべき作品であった」と述べている³。ランダルの評価などを念頭にシンポジウムの前半は『はだしのゲン』論が中心となつたが、後半ではマンガの中の歴史描写と海外における日本マンガについて意見が交わされた。その研究報告は、上記の3つのテーマから構成される論文集として、2006年6月に英語版で発行された。具体的な内容は以下の通りである。

1. Readings of *Barefoot Gen*

- Itô Yû & Omote Tomoyuki: *Barefoot Gen* in Japan: An Attempt at Media History
- Roger Sabin: *Barefoot Gen* in the US and UK: Activist Comic, Graphic Novel, Manga
- Sabine Fiedler: *Nudpieda Gen - Hadashi no Gen* in an International Speech Community
- Ôgi Fusami: *Barefoot Gen* and MAUS: Performing the Masculine, Reconstructing the Mother

2. Depictions of History in Japanese Comics

- Bettina Gildenhard: History as Fiction: Historiography within Japanese Comics as Seen through Tezuka Osamu's Manga *Adolf*
- Jaqueline Berndt: 'Adult' Manga: Maruo Suehiro's Historically Ambiguous Comics
- Stephan Köhn: Glimpses of the Past: The Allegedly Authentic Samurai Spirit as Seen through *Kozure ôkami* (*Lone Wolf and Cub*)

3. Reading Manga beyond Japan

- Jean-Marie Bouissou: Japan's Growing Cultural Power: Manga in France
- Jens Balzer: The Roses of Coconino: Reading the *shôjo* in *Krazy Kat*
- Pascal Lefèvre: Overlooked by Comics Experts: The Artistic Potential of Manga as Revealed by a Close Reading of Nananan Kiriko's *Kuchizuke*
- Yamanaka Chie: Domesticating Manga? National Identity in Korean Comics Culture

Steffi Richter: Reading *Reading Manga*: Personal Reflections by a Japanologist

シンポジウムの中心となる具体例に『はだしのゲン』を選んだきっかけの一つは、新しいドイツ語版が発行されたことにある。終戦60周年を記念し、2004年から

フランスにおける若者マンガ読者層とBD

猪俣紀子 Noriko INOMATA

大阪府立大学人間文化学研究科

はじめに

フランスでのマンガの受容について、その代表的消費層である若者市場がフランスに定着した理由をさぐる。そのことを特に編集・製作システムから明らかにすることを目的とする。

まずフランスでのマンガの受容の歴史を3世代に分け、その需要の歴史の特徴と共に見える。次に若者向けBDの製作体制とBD雑誌の衰退について考察する。最後に日本の二つの雑誌の具体例を挙げ、若者が中心的な消費者となった日本と、そうならなかったフランスのケースを比較する。

I フランスにおける日本マンガの受容の歴史

フランスは日本に次ぐ、人口当たりのマンガ消費世界第二位の国である。¹ しかしこの国のマンガ受容で興味深い点は、自国に伝統のあるBD(bande dessinée [フレンチコミック])の文化があることだ。BDの存在にもかかわらず、マンガは特に2000年以降、その経済的効果からフランスでも広く認知されるようになった。現在ではマンガ市場の発展のおかげで、学術的研究テーマとして扱われるようになっている。

I-1 フランスでのマンガ市場の発展

まずフランスでのマンガの受容の歴史をみよう。1994年から2005年までの数年間のマンガの新作タイトル数をみると、11年間に、出版される新作のタイトル数は70倍になっている。² 2005年にはBD2701冊の新作のうちマンガが1142冊(重版を含む)を占め、全体の37%を占めている。マーケティング会社GfKによると、「BDのなかで、マンガは2004年は2003年に比して、冊数において39%、売上高において46%増加している。〈中略〉このジャンルは決定的に右肩上がりの成長をした」³とされる。マンガを含めた新刊点数が481冊だった1995年の停滞後は、BDの市場は、出版全体の市場に比べると常に好景気な状況である。少なくとも、2000年以降のリーブルエブド⁴のBD市場についての年間記事では、BDと子供向けのセクションが出版物市場の牽引役であると記述している。

I-2 フランスにおけるマンガの歴史的定着

ここで簡単に導入の歴史を見てみよう。どのようにマンガはフランスに入ってきたのだろうか。その導入についてメディアとフランスの若者が受け入れていった過程、そのあたらしい文化の実践の方法に焦点を当てる3世代に分けられる。最初は“ゴールドラック”、第二に“クラブドロテ”、最後に“新しい読物”とした。

A ゴールドラック期 (1978-1986年) — 日本アニメの発見

1978年初めてのマンガ雑誌『Le cri qui tue』がフランスで出版されたが、マンガの第一世代の大多数は、同じ年に放映された日本アニメによりマンガへの導入を始めている。⁵ 初めて放映された日本アニメは1974年の「サファイヤ姫」だが、フランス社会へのインパクトを考慮すると最初の重要なアニメは78年に放映された「UFOロボグレンダイザー」(フランス版タイトルGoldorak)であろう。⁶ それはそのとき複数の日本アニメが、夏の間バカンスに発って番組を欠番する司会者の穴埋めとして放映されたものだ。⁷

初めての放映はこのように単純で物理的な要請への答えとして始まった。「UFOロボグレンダイザー」の大成功を予想したものは誰一人いなかったが、現在までに10回以上も再放送されており、40歳以下のフランス人でこの作品を知らないものはないといつても過言ではない。この番組は「クラシックなアメリカの作品や、数少ないフランスの作品とはなんの類似点もなかった」⁸また、「親たちはその暴力性と雑さに驚き、子どもたちはそれが自分が欲しているもので、このアニメが子どものために考えられたものだと分かっていた。」⁹と評されている。フランス人の子ど